

日本語オンライン授業の実践と授業評価アンケートによる分析

——名古屋大学国際言語センターにおける取り組み——

石 崎 俊 子

1. はじめに

日本及び世界に混乱をもたらしている新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、名古屋大学国際言語センター¹⁾が提供する日本語の授業は2020年度春学期において、すべてオンラインでの授業となった。国際言語センターではそれまでも多種多様なオンライン教材²⁾を開発し、授業内外で積極的に導入してきたが、対面授業なしの全面的なオンライン授業実施は初めてであった。この全授業オンライン化で行われた15週間の日本語の授業を学習者はどう捉えたのか、2019年度秋学期も同センターで対面授業を受講した学習者を対象にアンケート調査を行い、分析を行った。本稿ではアンケートの集計結果の定量的な分析とともに、自由記述欄の回答をテキストマイニング法により定性的にも分析することで、With コロナ、Post コロナにおける日本語の授業のあり方について考察した。

2. 本研究の目的

本研究の目的は(1) オンライン授業のアンケートの選択回答形式の回答結果を定量的に分析する。(2) オンライン授業のアンケートの記述回答形式の回答結果のデータをテキストマイニング法によって定性的に分析するという2つのプロセスを経て、オンライン授業アンケートの「授業の良かった点」、「授業の改善点」を抽出し、これからの日本語の授業のあり方を提案することである。

3. 先行研究

テキストマイニング法を用いた授業評価アンケートの分析はこれまでに多数なされている。安間(2016)、岩森(2020)、阪上(2015)は受講者を対象に授業に対する学生の反応の調査を行い、回答データのテキストマイニング法による分析結果を今後の授業運営の改善に活かすことが可能であるとしている。また、越中ら(2015)は学部学生の授業評価を自由記述のアンケートで行い、全体的な傾向の可視化を試みた結果、これまでの授業評価アンケートの自由

(1)

記述の分析とほぼ同様の傾向が一定の客観性をもって示されたと結論付けている。オンライン授業の分析としては武谷・渡（2015）が早稲田大学のオンデマンド講義と、毎回の文章課題で構成されている「学術的文章の作成」の授業後アンケートの満足度をテキストマイニング法で分析し、授業改善に向けた具体的な提案をしている。これまでの先行研究を概観すると、自由記述回答は、多数の自由記述のデータを客観的に全体的な傾向を把握することは極めて困難であり、要約するとしても解釈が恣意的・主観的な解釈となる恐れがあるなどの理由から自由記述文章を量的データに変換し、多変量解析を適用するテキストマイニング法の使用に至っている（武谷・渡 2015）。それぞれアンケートの対象者は違うものの、テキストマイニング法を使用して自由記述の回答を分析し、授業改善のための提案を行っている。

新しい知見としては、武谷・渡が「テキスト・マイニングを行った場合でも、分析の最終地点において、原文を確認することは不可欠である」（武谷・渡 2015: 1）と新たな分析方法を提案している。また、越中他は、これからの課題として、「授業評価アンケートにおける自由記述と他の質問項目（授業満足度など）との関連を探ることも可能であろう」（越中他 2015: 73）と言及している。

本稿ではこれまで分析対象となっていないオンラインの語学授業の評価の分析を越中（2015）の提案である自由記述回答と選択回答の関連付けを行いつつ、また、武谷・渡（2015）の提案したテキストマイニング分析後の原文確認も交えながら考察する。

4. 国際言語センターの日本語クラスの概要

名古屋大学国際言語センターでは全学日本語プログラム、日本語研修コース、日本語・日本文化研修コース、学部日本語、短期交換留学（NUPACE）日本語プログラム、短期日本語プログラム（NUSTEP）の6つの日本語プログラム及びコース³⁾で日本語の授業が開講されている。今回はその中で日本語オンライン授業実践を行った短期交換留学（NUPACE⁴⁾日本語プログラムに焦点を当て、授業評価アンケート分析を行った。短期交換留学（NUPACE）は、名古屋大学と学術交流協定を締結している大学に在籍する学生が、4ヶ月から12ヶ月間、名古屋大学に留学するプログラムであり、日本語、日本研究・国際理解科目、専門分野科目などを受講している。毎学期、約150名の留学生在が名古屋大学で学んでおり、そのうちの約80%は国際言語センターが提供する日本語の授業を1から15単位の幅で受講している。留学生は専門科目のスケジュールとの兼ね合いから受講できる日本語の授業数が変わってくるが、延べ数で毎学期約250人が日本語の授業を受講している。クラスは日本語入門レベルから上級レベルまで7レベルあり、初級は文法、聴解、会話、作文が合体したクラス、それ以外は技能別のクラスとなっている。

4.1. 2020年春学期以前の日本語の授業

NUPACEの留学生（以下、「学生」と呼ぶ）は大学の寮に住み、今では当たり前ではなくなりましたが、授業のある時間に教室に行き、対面授業を受けていた。語学授業のため、講義形式の一方向の授業ではなくインタラクティブな活動が多い双方向の形式で授業を行っていた。先述の国際言語センターが開発したオンライン教材を導入しているクラスもあったが、部分的で補助的な利用であった。また、Zoomなどの動画で会話でき、画面が共有できるツールを利用した授業は行っていなかった。

4.2. 2020年春学期の日本語の授業

学生は2019年の4月もしくは9月末に来日し、約半数は4か月の留学を終え2月に帰国する。従来であれば4月に新規生が来日するのだが、2020年の春学期の新規生は新型コロナウイルス感染症の影響で渡日不可能となり、受け入れが中止することになった。つまり、新規生はゼロとなり継続生のみが国際言語センターが提供する日本語の授業を受講することになった。春学期の日本語の授業は大学の方針に従い、全面的にオンライン化となり、初日の4月17日(金)から学期末まで対面授業が実施されることはなかった。オンライン授業になったことにより、帰国してリモートで受講を継続した学生も合わせて71人（異なり数）が日本語の授業を受講した。授業形態はパワーポイント、ワード、NUCT⁵⁾等を利用した一方向型授業とZoomを利用した双方向型授業の組み合わせで一方向型授業と双方向型授業の時間配分はクラスによって担当教員が決定した。

5. アンケート調査の概要

- (1) 実施期間：2020年7月22日(水)～7月28日(火)
- (2) 形式：アンケート形式（選択回答形式と記述回答形式）
- (3) 対象：2020年春学期にNUPACE日本語コースに在籍の初級から上級までの学習者60名（異なり数）
- (4) アンケートの内容
 - ・質問1～8（選択回答形式）

授業への参加度、理解度、満足度、教師の教え方、教材、課題などについて8項目の項目を用意し、A.あてはまる、B.ややあてはまる、C.あまりあてはまらない、D.あてはまらない、の4つの選択肢から1つを選ぶ形にした。
 - ・質問9～11（選択回答形式）

オンライン授業に特化した項目も含めた。①来年からの学生が、この授業を受けるとき、どのような方法が良いか、②オンライン授業で良かったと思うこと、③オンライン授

業で困ったことの3項目である。質問1～8と同じく選択回答形式で複数回答可である。選択項目は東京工業大学(水本2020)、国際基督教大学(ICU Center for Teaching and Learning 2020)、九州大学(野瀬2020)のオンライン授業に関する学生アンケートの結果を参考に作成した。

・質問12(記述回答形式))

「この授業の中で、これからも続けていったら良いと思う所はどこですか。また、良くしたほうが良い所はどこですか。」と質問し、これについては任意の記述式での回答とした。

- (5) 実施方法: NUCTで授業後に実施。調査に要した時間は10分～15分程度であった。また、言語は日本語と英語の両方の質問を用意し、回答も英語でも日本語でも良いとした。

6. 分析方法

選択回答形式の回答は結果をグラフ化し、分析を行った。記述回答形式の自由記述文の回答は英語も可となっていたため、英語での回答は筆者が日本語に翻訳した後、テキストマイニングのために開発されたKH Coder³⁾と呼ばれる解析ソフトウェアを使用してテキスト分析を行った。具体的な分析方法は開発者である樋口(2020)のマニュアルを参考に以下に記す。

- (1) エクセルの各行に1行ずつ自由記述文を入力する。
- (2) (1)のデータをエクセルで読み込み、KH Coderを利用して頻出語リストを作成する。
- (3) (2)をもとに表記の揺れの統一、語の削除などを行った後、前処理を行う。末吉(2019)は前処理を形態素解析エンジン(MeCabやChaSen)の辞書を用いて「形態素分析」を行うことであると説明している。
- (4) 対象となる語の共起関係を視覚化するため、KH Coderを使用してクラスター分析のデンドログラムと共起ネットワーク図を作成する。また、KWICコンコordananceを使用して実際にどのような文章の中で使われているのか、また、コロケーション集計を通して語の関係も探りながら考察を行う。

7. 解析結果

以下の2種類の回答結果を分けて表示する。

- (1) オンライン授業のアンケートの選択回答形式(質問1から11)の回答結果
- (2) オンライン授業のアンケートの記述回答形式(質問12)の回答結果

7.1. オンライン授業のアンケートの選択回答形式の回答の解析結果

質問1から8までの回答の結果を図1から図8に記載した。あてはまるとややあてはまるを合計すると、全ての回答が80%以上となっており、全体的にどの質問にも肯定的な回答であった。特に肯定的な回答が得られたのは「シラバスに説明されている目的と内容に沿って勉強できた」で、85%があてはまると回答し（図1）、そして、「授業で意見を言ったり、質問や発表したりできた」で、84%があてはまると回答した（図6）。

質問9から11までの回答の結果を図9から11に示した。図9の「来年からの学生が授業を受けるときの方法」を問う質問の回答は、「Zoom等による双方向授業」が「教室などでの対面授業」を上回る結果となったことが読み取れる。一方、同じ「Zoom等による授業」でも単方向ライブ授業を選択する学生は一番少なく、録画ありはやや選択されたものの他の授業方法より選択率は少なかった。動画の利用はZoomなどを利用した双方向授業以外は低く評価されていることが示唆される。

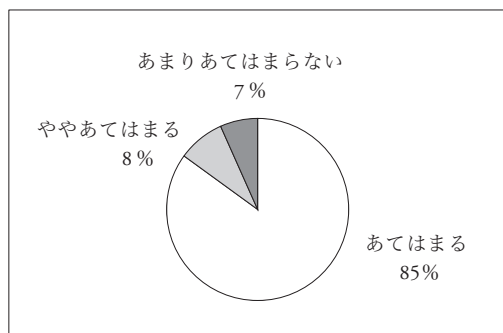


図1 シラバスに説明されている目的と内容に沿って勉強できましたか

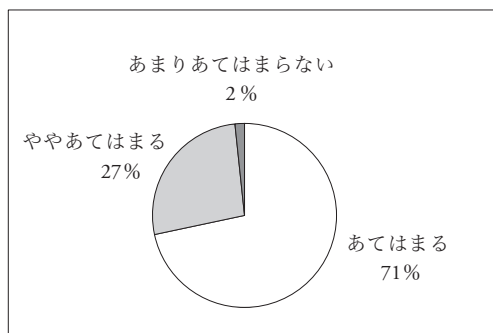


図2 この授業に積極的・自発的に参加しましたか

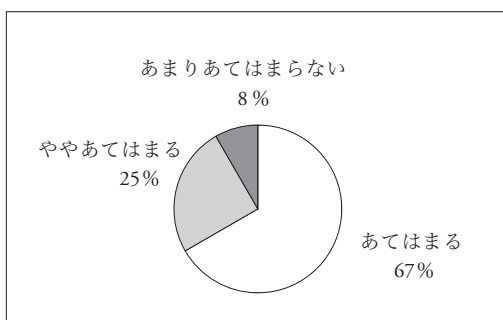


図3 この授業内容を理解できましたか

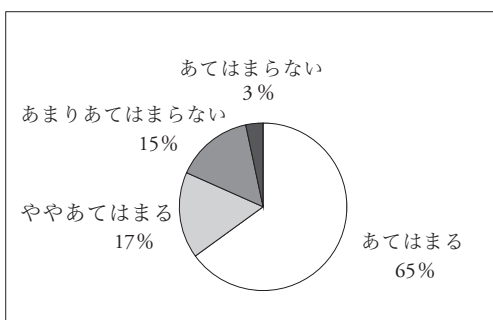


図4 この授業に満足しましたか

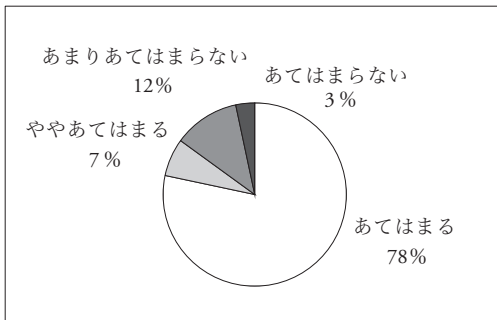


図5 先生の教え方は良かったですか

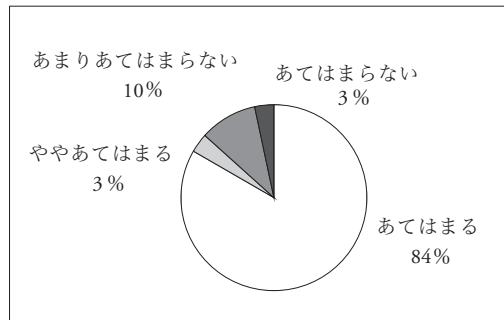


図6 授業で意見を言ったり、質問や発表したりできましたか

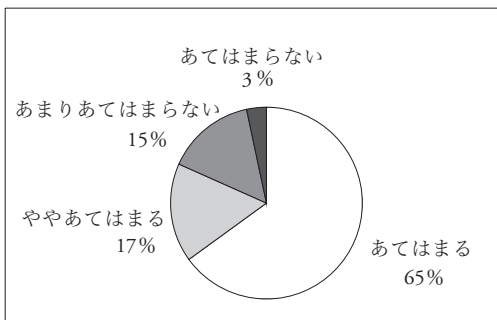


図7 教材(パワーポイントなど)は役に立ちましたか

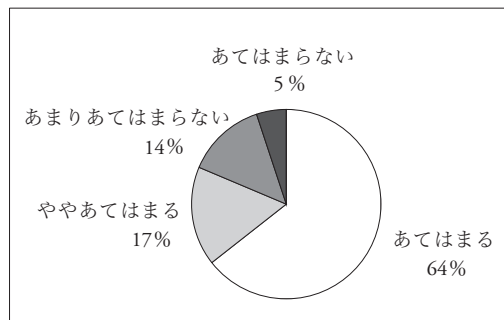


図8 課題は役に立ちましたか

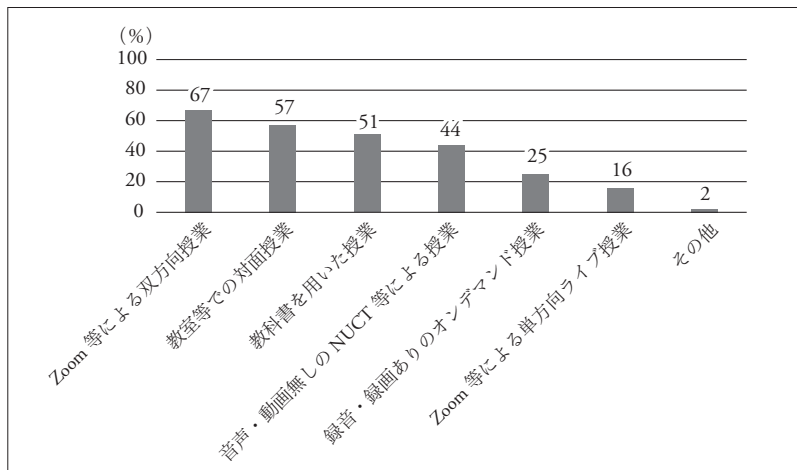


図9 来年からの学生がこの授業を受けるとき、どのような方法が良いと思いますか

オンライン授業での最大の利点は「家で勉強できる」というのが75%で一番選択率が高く、次いで52%が「先生に質問しやすい」を選択していることが図10からわかった。

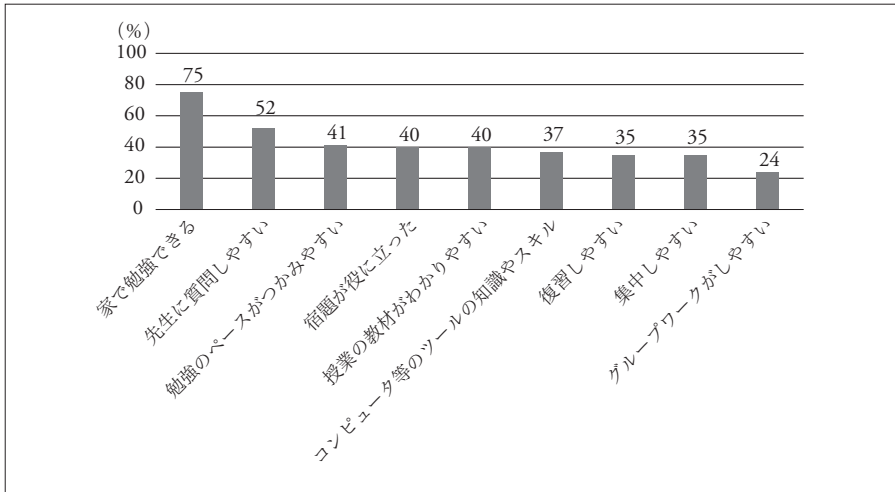


図10 オンライン授業で良かったと思うこと

図11からはオンライン授業で困ったこととして「ネット環境が十分でない」が59%、「友達と一緒に勉強できなくてさみしい」が51%選択されていることが読み取れる。

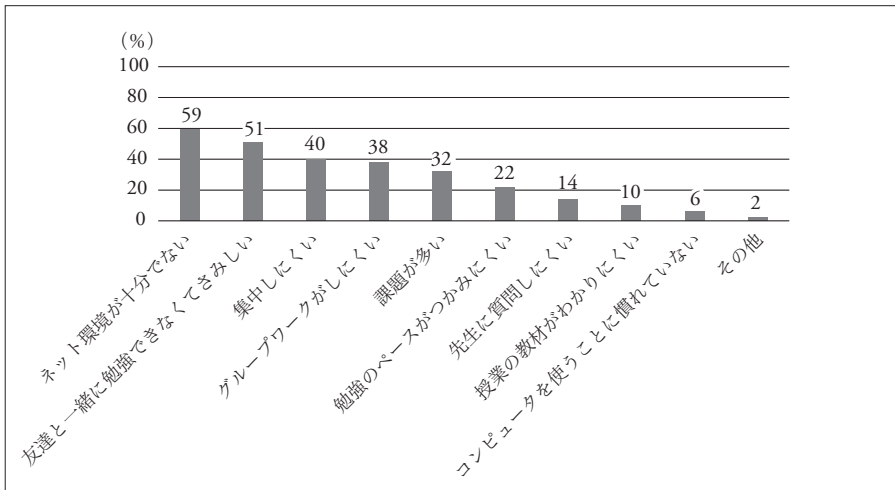


図11 オンライン授業で困ったこと

7.2. オンライン授業のアンケートの記述回答形式の回答の解析結果

記述回答形式の解析は5.分析方法の手順で示したとおりいくつかのプロセスを経るため、プロセスごとに結果を表示する。

7.2.1. 抽出語リストの作成

まず、質問12の「この授業の中で、これからも続けていったら良いと思う所はどこですか。また、良くしたほうが良い所はどこですか。」の回答欄には良いところ、良くしたほうが良いところ、悪いところが混在していた。従って、全ての自由記述を確認し、手動で「授業の良いところ」（以下、授業の良かった点）、「授業の良くしたほうが良いところと悪いところ」（以下、授業の改善点）の2つのグループに分類した。次に、KH Coderで「授業の良かった点」と「授業の改善点」のそれぞれの抽出語リストを作成し、それぞれの抽出語リストをもとに以下の2つの作業を行った。

- (1) 表記の揺れを統一した。統一前と統一後の語の一覧は表1のとおりである。

表1 「授業の良かった点」「授業の改善点」の回答の表記の揺れの統一表

統一前	統一後
教師	先生
convid19/パンデミック	コロナ
パワーポイント、パワポ	ppt
学習する	学ぶ
ネット/wifi	インターネット
生徒	学生
たくさん	多くの
クラス	授業
演習	練習
Zoom セッション	Zoom

- (2) 抽出語リストの「思う」と「非常」「とても」「本当に」の4語の削除を行った。語の削除基準は、削除しても文章の根本の意味に影響を与えないものとし、以下に参考となる事例を挙げた。

①思う

例1 話す力が向上したと思います。

例2 すべての教材はとても面白かったと思う。

例3 小テストも役にたつと思います。

②非常

例1 宿題とテストのレベル差が大きかったので、非常に混乱しました

例2 理解するのが本当に難しい

例3 先生はとても親切です

揺れの統一と削除の作業後、再び抽出語リストを作成した。「授業の良かった点」と「授業

の改善点」頻出語の内の上位15語とその出現頻度を表2に示す。

表2 「授業の良かった点」と「授業の改善点」について抽出された頻出語リスト（上位15位）

順位	授業の良かった点		授業の改善点	
	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
1	先生	16	授業	30
2	授業	15	教科書	13
3	良い	13	文法	13
4	面白い	11	Zoom	10
5	役に立つ	8	学生	10
6	教科書	7	時間	10
7	ありがとう	6	理解	10
8	説明	6	良い	10
9	練習	6	難しい	8
10	課題	5	必要	8
11	質問	5	分かる	8
12	詳しい	5	インターネット	7
13	話す	5	日本語	7
14	ppt	5	文	7
15	学ぶ	4	内容	6

7.2.2. 前処理の結果

以上の作業を行った後、KH Coder を用いて前処理を実行し、文章の単純集計を行った結果「授業の良かった点」については54の段落、67の文が確認された。また、総抽出語数は905、異なり語数は375であった。さらに、助詞や助動詞などが除外され、分析に使用される語として213語（異なり語数144）が抽出された。また、「授業の改善点」については79の段落、88の文が確認された。総抽出語数は1739、異なり語数は743で、最終的に分析対象語として410語（異なり語数299）が抽出された。

7.2.3. 階層的クラスター分析

「階層的クラスター分析では設定された算定基準によって数量的に「似ている」とみなされた語と語同士が結合され、その過程がデンドログラム（樹形図）で示される」（末吉 2018: 101）。また、図の左側のほうで結合するほど似ている関係にあるとされている。今回の分析では、「授業の良かった点」は抽出後の最小出現数を「6」、文書とみなす単位を「文」と設定し、全品詞を選択し、「授業の改善点」は抽出後の最小出現数を「7」、文書とみなす単位を

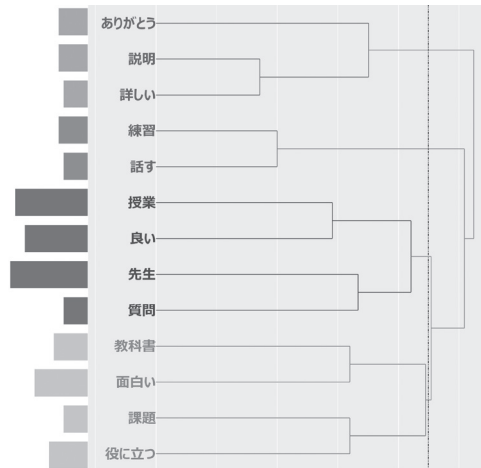


図12 「授業の良かった点」についてのクラスター分析のデンドログラム

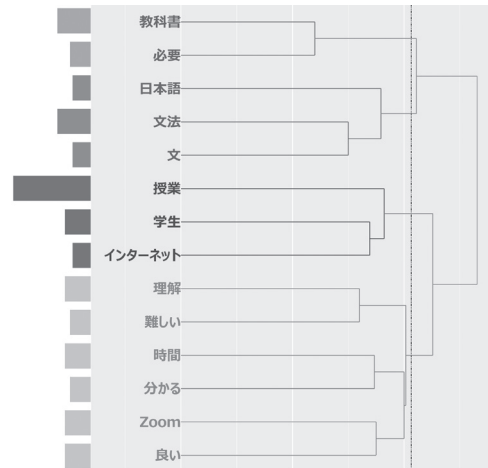


図13 「授業の改善点」についてのクラスター分析のデンドログラム

「文」と設定し、全品詞を選択してデンドログラムを作成した（図12, 13）。

(1) 「授業の良かった点」についての階層的クラスター分析

「授業の良かった点」についての階層的クラスター分析を図12に示した。解析結果を見ると、「詳しい説明」「話す練習」「授業と先生」「課題と教科書」の4つのクラスターで構成されており、これらに対して肯定的な評価を得ていることが分かった。

(2) 「授業の改善点」についての階層的クラスター分析

「授業の改善点」についての階層的クラスター分析を図13に示した。解析結果を見ると、「教科書の必要性」「文法」「授業とインターネット」「Zoomと理解」の4つのクラスターで構成されており、これらに対して改善を求められていることが分かった。

7.2.4. 共起ネットワーク

文章中に出現する語と語が共起する関係性を見るために共起ネットワークを作成した。今回の分析では「授業の良かった点」の設定は抽出後の最小出現数を「5」、文書とみなす単位を「H5」、上位「15位」と設定し、全品詞を選択して作成した（図14）。また、「授業の改善点」の設定は抽出後の最小出現数を「7」、文書とみなす単位を「H5」、上位「15位」と設定し、全品詞を選択して作成した（図15）。共起ネットワーク図は語の出現回数が多いほど円が大きく表される。また、線と線で結ばれている語は関連性が強く、線の太さが関連の強さとして表現される。

(1) 「授業の良かった点」についての共起ネットワーク図

「授業の良かった点」についての共起ネットワーク図を図14に示した。「授業の良かった点」

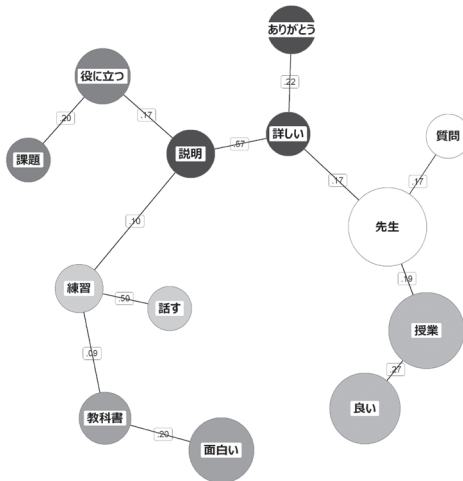


図14 「授業の良かった点」についての自由記述の共起ネットワーク

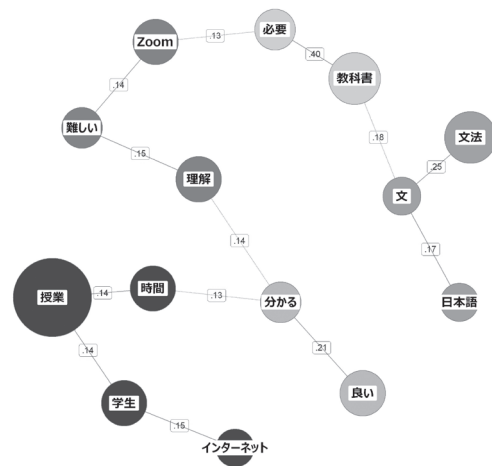


図15 「授業の改善点」についての自由記述の共起ネットワーク

の共起ネットワーク図から「先生」「授業」「教科書」「説明」「課題」「話す練習」の6つのサブグラフが確認された。その中で「授業—良い」「教科書—面白い」「説明—詳しい」「課題—役に立つ」「話す—練習」に強い共起が見られた。

(2) 「授業の改善点」についての共起ネットワーク図

「授業の改善点」についての共起ネットワーク図を図15に示した。「授業の改善点」の共起ネットワーク図から「授業」「文法」「教科書」「Zoom」「分かる」の5つのサブグラフが確認された。その中で「授業—学生—インターネット」「文法—文—日本語」「教科書—必要」「Zoom—難しい—理解」「分かる—良い」に強い共起が見られた。

8. 考察

まず、授業全体について問う選択回答形式質問1～8のすべての質問に80%以上の肯定的な回答があったということは、全体的に学生はオンライン授業に対して満足していたのではないかと考える。ここからは自由記述回答と選択回答の関連付けを行いつつ、テキストマイニング分析後の原文確認も交えながらオンライン授業の良い点、改善点を考察する。

表3の階層的クラスター分析と共起ネットワーク分析から得られた語の一覧によると、「授業に良い点」では階層的クラスター分析と共起ネットワーク分析の両方に「先生」「授業」「教科書」「説明」「話す練習」「課題」の語が、「授業の改善点」では「授業とインターネット」「教科書の必要性」「文法」「Zoomと理解」の語が含まれていた。従って「先生」「授業」「課題」「教科書」「説明」「話す練習」「文法」「インターネット」「Zoom」が考察の対象となる

キーワードとなる。

表3 階層的クラスター分析と共起ネットワーク分析から得られたキーワード

	階層的クラスター分析	共起ネットワーク分析
授業の良い点	授業と先生	先生
		授業—良い
	課題と教科書	教科書—面白い
		課題—役立つ
	詳しい説明	説明—詳しい—ありがとう
話す練習	話す—練習	
授業の改善点	教科書の必要性	教科書—必要
	文法	文法—文—日本語
	授業とインターネット	授業—学生—インターネット
	Zoomと理解	Zoom—難しい—理解
		分かる—良い

8.1. 「授業の良かった点」の考察

「授業の良かった点」の上記のキーワードを出現頻度の多い順に考察する。

(1) 先生

共起の結びつきは強くないが、「先生」と共起している「質問」について見てみることにする。「質問」に関しては選択式のアンケートの「授業で意見を言ったり、質問や発表したりできた」の回答に84%の肯定的な反応があり、原文を見ると、「先生はとても親切で多くの質問をしました。」や「先生は私たちの質問に親切に答えてくださった。」など授業中の質問に先生が丁寧に対応したことに学生たちは満足している様子がうかがえる。さらに、「Zoomで先生に質問しやすいです。」「Zoomのプレゼンテーションと質問は良かった。」の原文に見られるようにZoomを使うことによって先生との繋がりを身近に感じられるのではないかと推測できる。また、アンケートの回答にはなかったが、今学期は先学期に比べ、受講者人数が少なかったため授業中に先生と話す機会が多いとコメントした学生がいる。確かに今学期は先述したように新規生の来日がかなわず、受講生が従来の約半分となっている。アンケートに回答した学生は先学期の日本語の授業も国際言語センターで受講しているため、先学期と比べると受講者数の減少により、授業中に発言する回数、発表する回数、先生と直接接する回数が増加したと感じたのも一つの要因であると推測される。しかしながら、この先、人数の多いオンライン授業であっても学生への質問や発言の場を工夫して提供することは重要であると考えられる。

(2) 授業

「授業」のコロケーションを集計すると、「進む」が多く使われていることが分かった。学生

たちの自由記述の原文を参照すると「コロナの状況にもかかわらず、授業がうまく進んでいたのです。」「授業の進み方は全部良かった。」「大抵オンラインの授業はうまく進み、質問を聞くことはやりやすかったです。」という声が寄せられている。また、選択式のアンケートの「シラバスに説明されている目的と内容に沿って勉強できた」の質問に85%があてはまると肯定的な反応をしている。回答した学生らは、先学期も国際言語センターの日本語の授業を対面で受講しているため、対面とオンライン授業を比較することが可能である。その上で良かったとコメントしているということからオンライン授業は対面授業と比較しても授業の目的、内容の質を保持できていたと言えるのではないだろうか。

(3) 教科書

教科書が面白い、わかりやすいなどの声が多かったが、教科書は対面授業時と同じものを使用しているのでオンライン授業の影響ではないと推測される。

(4) 説明

「説明」と共起している語に着目したところ、「詳しい」「ありがとう」と共起しており、学生は先生の詳しい説明に満足しているようである。原文を参照すると「先生が授業で詳しく説明してくれたのが役に立った。」「文法の詳しい説明が良かった。」という声が見られた。対面授業でも詳しく説明することは必要な対応と考えられるが、オンライン授業も同様に単方向ではなく双方向の授業で学生のニーズを判断し、適切な対応を心がける必要があることがわかった。

(5) 話す練習

原文を見ると、書く、聞くという語も見られたが、今回のアンケートでは「話す練習」が特に充実していたようである。「短い作文を書く練習をするだけでなく、ロールプレイを作って話す練習をするのは良かった。」「前期の時よりも話す練習をしたことで、話す力が上達した。」など話す練習をする機会を与えられたことに満足している様子うかがえる。繰り返しになるが、双方向のオンライン授業を行うことは大前提で、さらに、話す練習を積極的に取り入れる工夫をしなければいけないのではないかと考える。

(6) 課題

「課題」と共起している語に着目したところ、「役に立つ」と共起しており、学生は課された課題に満足していることがうかがえる。記述式回答の原文によると「課題の量がちょうど良かった。」「初めて書評やコラムの課題をして、とても面白い課題だった。」などが学生の反応であるが、クラスによって課する課題が違うので、個々の担当者にインタビューを行い、課題の量を含め理想的な課題の課し方を詳しく調査する必要があるだろう。

8.2. 「授業の改善点」の考察

「授業の改善点」も出現頻度の多いキーワード順に考察を行う。

(1) 授業とインターネット

「授業」についてはクラスター分析では「授業とインターネット」が類似性の高い語として認識され、共起ネットワークでも「授業」の出現数が一番多く、「学生」と「インターネット」に共起していることが確認された。原文を参照すると「多くの場合、インターネット接続の不良が原因で学生が遅れ、そのせいで私たちが授業の内容を理解することが難しくなりました。」「授業で困ったことは授業の内容ではなく、インターネットを使った授業だということのせいだった。」などの声が寄せられていた。これらのことをまとめると、インターネットの接続不良が原因で授業に支障があったことが授業に不満を持った最大の理由であると言えるのではないだろうか。この件に関しては、選択式アンケートの質問11の「オンライン授業で困ったこと」で「ネット環境が十分でない」の選択率が59%で一番多く選択されていることからこれからの課題として考えていく必要があると思われる。

(2) 教科書

クラスター分析では「教科書と必要性」が類似性の高い語のグループで、共起ネットワークでは「教科書」の出現数が2番目に多く「必要」と強く共起している。原文を確認すると「新しい教材が必要であり、教科書はそれほど重要ではないはずです。」「教科書と副教材の改善が必要である。」などオンライン授業の影響とは関連がないように見受けられる。しかしながら、教科書の見直しが必要であることは明らかであり、学生たちの声を反映して改善が必要であると考えられる。

(3) 文法

文法のポイントがわかりにくい、文法が難しいなど対面授業でも起こりうる事例であり、原文を探索した結果、オンライン授業である要因は見受けられなかった。

(4) Zoom

「Zoom」は「難しい」「理解」との共起関係が確認された。Zoomなしでは理解が難しいことが示唆され、このことは次に示す原文からも裏付けられる。「Zoomをすることは、みんなが宿題や教科書を理解していることを確認するために、最初または最後に10-15分でもいいので必要です。」「そして学期の半分の間 Zoom がない。」「難しい教科書の勉強に時間がかかり、Zoom もありませんでした。」と Zoom セッションがないことに対するかなり強い不満が見受けられ、Zoom セッションを熱望していることがよくわかる。選択形式アンケートの質問9は「来年からの学生がこの授業を受けるとき、どのような方法が良いと思いますか」であり、最も選ばれた授業の方法は「Zoom 等による双方向授業」であった。岡山大学(2020)の実施したアンケートでも同様に、リアルタイム型の授業型の満足感が他の授業方法より高かったという結果が出ている。選択率が67%という結果から Zoom 等による双方向授業が最適の授業方法とは言えないが、教室などでの対面授業を上回る選択であったというのは Post コロナも対面授業と Zoom 等による双方向のオンライン授業の併用が可能性としてあるということでは

ないだろうか。では、なぜオンライン授業が学生に受け入れられているのだろうか。質問10の「オンライン授業で良かったと思うこと」の回答によると「家で勉強できる。」が75%と選択率が高かったが、次点は「先生に質問がしやすい。」が52%、そして他の要因を選択した学生は半分に満たなかった。「家で勉強できる。」がなぜ良いのか、その詳しい理由を今後インタビューなどで明らかにすることによって、Post コロナでもその良い部分を十分活用できるのではないだろうか。

(5) 課題

「課題」については東京工業大学（水本 2020）、九州大学（野瀬 2020）をはじめ、岡山大学（岡山大学 2020）、立教大学（立教大学 2020）が実施したオンライン授業アンケートによると課題の量が多すぎると指摘している学生の声が多数であるという結果になっている。筆者の機関で行ったアンケートでは「課題は役に立ったか」という質問であり、課題の量は聞いていないが、自由記述の原文で「先生方が状況を補うために多くの課題を出しているような気がしますが、それが良い考えではない。」「課題に時間がかかるので最悪でした。」など課題の量の多さについて言及しているものも見受けられた。筆者の機関でのオンライン授業は一方向型授業と双方向型授業の組み合わせで行っているため、課題を課すだけの一方向型のオンライン授業と比較すると課題の量は少ないと推測される。したがって問題視している学生は多くはないという現状であるが、オンライン授業では配慮しなければいけない重要な点であることは間違いない。

9. まとめ

本稿では2020年春学期の日本語オンライン授業評価アンケートの選択回答と自由記述回答について定量的及び定性的分析を行った。定量的分析はグラフで、定性的分析は階層的クラスターと共起ネットワークで全体的な傾向の可視化を試みた。選択回答と自由記述回答の関連付けを行いつつ、自由記述の原文を参照しながら分析を行った結果、これからの日本語のオンライン授業のあり方を次のように提案する。

日本語オンライン授業では、学生はインターネットの接続不良を問題視しているものの、Zoomなどを利用した双方向授業を強く希望している。そして、学生には対面授業と同様の質問や発言が多くできる環境の提供と、学生のニーズを的確に判断し、詳しい説明をするなどの対応が必要とされている。また、オンライン授業では課題の量が多くなる傾向があるため配慮が必要である。将来的に Post コロナにおいても対面授業と Zoom 等による双方向のオンライン授業の併用の可能性も視野に入れ、これからの日本語の授業の再設計が必要であるのではないかと考える。

注

- 1) 名古屋大学国際言語センター <http://jp.ilc.iee.nagoya-u.ac.jp/ja/> (2020年10月3日取得)
- 2) 名古屋大学 国際言語センター 日本語オンライン教材 <http://jp.ilc.iee.nagoya-u.ac.jp/ja/online/> (2020年10月3日取得)
- 3) 名古屋大学国際言語センター日本語プログラム <http://jp.ilc.iee.nagoya-u.ac.jp/ja/> (2020年10月3日取得)
- 4) 名古屋大学短期交換留学受入れプログラム <https://nupace.iee.nagoya-u.ac.jp/ja/index.shtml> (2020年10月3日取得)
- 5) NUCT (Nagoya University Collaboration and course Tools) 名古屋大学で推奨されているコース管理システムのための Web アプリケーション <https://ct.nagoya-u.ac.jp/portal>
- 6) 樋口耕一「KH Coder 3」<http://kncoder.net/dl3.html> (2020年10月3日取得)

参考文献

- 安間文彦 (2016) 「授業評価アンケートの自由記述からの授業改善点分析」『eラーニング研究』5, pp. 7-22.
- 岩森美千代 (2020) 「KH Coder を活用した自由記述による授業評価アンケートの解析と客観化の試み」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』50, pp. 95-103.
- 越中康治・高田淑子・木下英俊・安藤明伸・高橋潔・田幡憲一・岡正明・石澤公明 (2015) 「テキストマイニングによる授業評価アンケートの分析—共起ネットワークによる自由記述の可視化の試み—」『宮城教育大学情報処理センター研究紀要』22, pp. 67-74.
- 岡山大学高等教育開発推進センター 学務部学務企画課教育支援グループ (2020) 「オンライン授業に関するアンケートについて」https://www.iess.ccsv.okayama-u.ac.jp/hedi/survey_onlineclasses/ (2020年10月3日取得)
- 阪上辰也 (2015) 「テキストマイニングによる英語授業に関する自由記述回答の内容分析」『広島外国語教育研究』18, pp. 55-64.
- 末吉美喜 (2019) 『テキストマイニング入門』オーム社
- 武谷慧悟・渡寛法 (2015) 「オンデマンド型ライティング授業の改善に向けた授業評価分析：顧客満足分析の視点によるテキスト・マイニング」『京都大学高等教育研究』, 21, pp. 1-14.
- 野瀬健 (2020) 「九州大学のオンライン授業に関する学生アンケート (春学期) について」大学教育改革推進本部 https://www.nii.ac.jp/event/upload/20200710-08_NoseNaganuma.pdf (2020年10月3日取得)
- 樋口耕一「KH Coder」<https://kncoder.net/> (2020年10月3日取得)
- 樋口耕一 (2020) 『社会調査のための計量テキスト分析 第2版』ナカニシヤ出版
- 水本哲弥 (2020) 「「COVID-19対応によるオンライン授業等の受講・学習・生活状況アンケート調査」の結果について」https://www.citl.titech.ac.jp/online_questionnaire/ (2020年10月3日取得)
- 立教大学 大学教育開発・支援センター 教学 IR 部会 (2020) 「立教大学オンライン授業についてのアンケート実施結果概要報告」https://www.rikkyo.ac.jp/about/activities/fd/qo9edr000005dbr-att/Study_online_200516_0521.pdf (2020年10月3日取得)
- ICU Center for Teaching and Learning 「2020年春学期 オンライン授業に関する 学生アンケートまとめ」<https://sites.google.com/info.icu.ac.jp/onlineclass-j/home?authuser=0> (2020年10月3日取得)

キーワード：日本語教育、オンライン授業、アンケート調査、テキストマイニング

Abstract

Practice and Analysis of Student Evaluation of Japanese Online Classes:
Initiatives at Nagoya University International Language Center

Toshiko Ishizaki

In the spring semester of 2020, all Japanese classes were held online for the first time at the Nagoya University International Language Center without face-to-face classes. We conducted a questionnaire survey of learners who previously took face-to-face lessons at the center in the fall semester of 2019, and analyzed how the learners perceive the 15-week Japanese online language classes. In this paper, I examined the ideal method of Japanese online classes in With Corona and Post Corona by quantitatively analyzing the results of the questionnaire and also qualitatively analyzing the free-form answers by the text mining method.

Keywords: Japanese language education, online classes, questionnaire survey, text mining method